

# Szondi Test の簡便的利用に関する研究

—Szondi Test の臨床的妥当性に関する基礎的研究 (上) —

奥野哲也

[抄録]

ソンディ・テスト (Szondi Test) の施行は1回実施するには、10分を超えない短時間での実施が可能である。したがって被験者に身体的な負担を掛けることが少なく、しかも「好き・嫌い」という、まことに単純なやり方の施行法であるから、心理的な負担も少ない。人物顔写真の「好き・嫌いの選択」といった単純で、簡単な方法であるため、施行年齢も3歳以上から可能であるなど、その適用年齢は驚くほど幅広い。また言語を中心にはしないため、聴覚や言語の機能に障害がある場合や日本語を解さない外国人であったりする場合も、施行に困難をきたす事は少ないなど、他の査定技法に較べて適応範囲が広い。施行が簡単であるという事は、検査者の側の場合も、施行技術法習得のための訓練は必要がない。このように他の査定技法に比較して、様々な利点があるにも係わらず、24時間以上・1週間以内という施行条件が設けられているために、正規法とされている10回施行を完全施行するには、かなりの時間が必要とされ、その結果、即戦力にならない、時代遅れの査定技法の要因がみられることは否めない。

こうした欠点を是正するために、この研究では1回法施行の臨床的妥当性を検証して、1回法ソンディ・テストの有用性を明らかにしようとした。

そこで152人を対象として、1回法と2回目以上の施行で得られた反応の連関係数 $\phi$ を産出する調査を行った。今回はh因子からp因子までの検討結果を掲載している。

キーワード Szondi Test, 1回法施行の妥当性, 1回目と2回目の連関

## § はじめに

L.Szondi. (1893 ~ 1986) が考案した Szondi Test は、生きた人間の「衝動」(Trieb) の解明をすることにあるので、当然ながら衝動は基本的には、常に刻々流動し、変化するものと考えられている。したがってL.Szondiが最初に、このテストについての構想をした時から、

繰り返して施行することは当然のこととして考えられていたと想像できる。それは Szondi Test が発表された時 (1947) には、その名を Der Experimentellen Triebdiagnostik (実験衝動診断法) と名づけられたことによっても、ある程度、明らかである。つまり衝動を診断するための実験的手法というわけである。これにはソンディ・テストを新しい診断技法として実験的に作製したものという、多少謙虚な感情も含まれていたものと思われるが、「流動して止まない衝動 (Trieb) を試験的に取り出して、今の状況を診断する」というニュアンスも含まれているものと考えられる。

L.Szondi は、臨床的経験から発想を深めて理論構築した衝動の遺伝に関する考え、つまり運命分析学 (Schicksalanalyse) (1944) 理論を証明するための道具である Szondi Test (1947) を発表した際に、衝動は常に变幻自在に変化し、常に流動する生きた人間の心の状況そのものであるから、ただ1回で得られる反応は、いわば流れる水の一瞬の状態であって、その人の長い人生を表象する心的現象とは言い難いものと考えた。しかし、変化流転するものばかりではなく、恒常性を持つ衝動も同時に含まれていると判断した。厳密かつ遠大に理論構築を重ねた L.Szondi らしい周到さであった。L.Szondi は、Szondi Test の有効性を世に問うには、変化する衝動 (Trieb) や変化しにくい衝動なども混在していることから、繰り返しテスト施行を重ねることが良いと判断し、結果的には10回施行が適切とした。しかし、恐らくは実際の臨床状況では、1回施行での活用も行っていただろうと思われる。なにしろ最短でも10日間、1日置きにすると20日間必要という、かなりの日数を要する査定技法なのである。そして Szondi Test では、1回毎に24時間以上経過して得られた10回施行法を基にして分析や解釈を行うのが良いとして Szondi Test の正規の施行回数としてこれを定めた。以来 Szondi Test は、10回法を基礎にした研究や検証が重ねられている。その後に関発された種々の尺度や指標も10回の反応データを基にして開発されている。10回を施行することで、準備された種々の指標や衝動範疇など量的指標の確定が可能となるわけである。したがってこれらは、あくまで10回という量的処理を中心に開発された指標であり、事例に関する病理学的な精神診断が必要であるとか、社会適応度を測定するといった特別な目的の場合は、当然10回施行をすることが求められる。

他の心理検査法の中で、被験者に負担をかけることの多い技法は MMPI, TAT, 始めロールシャッハ・テスト、クレペリン加算作業検査などいくつもあり、健全な人でも施行後に疲労を覚えるものも多い。とりわけ臨床場面では、被験者の心的負担を常に考えておかなければならない。しかしテストによっては、完了を翌日回しにしなければならない場合もある。こうした特別な状況にある臨床現場にとって、1回の施行がわずか数分で終わることができ Szondi Test は、非常に利用価値の高いものであるはずである。ただ上記したように10回全て終わるまでは、その結果を活用できないとすれば、他の査定技法よりも利用価値が低く、Szondi Test の活用は極めて限定されたものとなる。

筆者は Szondi Test の長年の臨床場面における活用経験から、1 回施行から得られるテスト学的な情報も 10 回施行に負けず劣らず重要かつ濃厚であることを体験しており、また 1 回目は、2 回目以降の反応と似通った反応が出現することが多いことを実際に経験している。もし、1 回目の反応と 2 回目以降の反応に大きな差異がなければ、特別な目的で Szondi Test を施行する以外の活用には 1 回施行で十分なテスト的価値があるといえる。

L.Szondi がテスト回数を複数回施行と定めた何らかの理由について以下のようなことが考えられる。つまり Szondi Test の場合は、人物顔写真の「好き嫌い」選択の結果からプロフィールが作成されるようになっている点にある。つまり「好き嫌い」写真選択について人物顔写真の選択を、半ば強制的に被験者に選択行為を強いるものの、その「好き嫌い」の根拠については、被験者に尋ねることはない。そのときの気持ちだけで選択するのである。したがって、気分や適応状態の変化といった、いわば状況の変化によって「好き嫌い」が決定され、「好き嫌い」の選択の基準は極めて流動的であると考えられる。その変化が、流動的で、かつ自由闊達に生きる人間の在り様を意味しているとも言える。従って Szondi Test は、10 回とも同じ人物の顔写真を用いることで、被験者の心的状況の変化や変わりにくさ、つまり恒常性・易変性を知ることが可能となる。こうした根拠によって L.Szondi は、テスト施行において繰り返し法の形態を採用するに至ったと考えられる。そして前述したように、事例に関する病理学的な精神診断が必要であるとか、社会適応度を測定するといった特別な目的の場合は、10 回施行法によることが求められる。こうした点から Szondi Test は繰り返し法の形態をとっている。しかしこれらは、あくまで 10 回という量的処理を中心に開発された指標であることに留意したい。L.Szondi は、Szondi Test の有効性を世に問うには、1 回施行法ではなく、10 回施行法が有効と考えていたが、実際の臨床状況では、1 回施行法は勿論のこと、2 回施行法やその他の回数についても便宜的に行っている。10 回を行うとすれば、最短でも 10 日間、最も適した施行間隔として大塚 (1993) が指摘している方法である 1 日置き (48 時間間隔) で施行すると最短 20 日間は必要という、かなりの日数を要する査定技法である。とても日常的な臨床場で Szondi Test を採用するには限界があり過ぎるといわざるを得ない。

しかし記述のように Szondi 自身は、個々の具体的症状と Szondi Test 反応の関連を検証するに際しては、1 回施行法の反応データや 2 回施行法の結果を示すなどしており、必ずしも 10 回施行法のみを厳格に固執したのではない。例えば Lehrbuch Der Experimentellen Triebdiagnostik (1947) (実験衝動診断法教科書) では、1 回施行法による解釈方法の解説が数例記載されている。そしてそこで示した 1 回の反応データを基に、かなり丁寧な解釈を行っている。したがってこの事実からでも Szondi 自身が、10 回施行法以外を否定的に考えていた訳ではないことは明らかなことである。米国におけるソンディ・テストは 10 回施行法ではなく、6 回施行法を正規の施行回数として用い標準化し、種々の尺度を計算して診断に利用するということが行われていて、ソンディ・テストの紹介本にも 6 回法を載せている (1959)。

いずれにせよ 1 回施行法では、症状の予後の良否を判断する際には有効と思われるいくつかの手法を適合することができない事からくる 1 回施行法への心理診断テストとしての価値は、判然と確かめられないままに Szondi Test が世に出てから半世紀を経過してしまった。Szondi 死後 (1986) からでも既に 20 年以上を経過している。

10 回施行法による問題は、なんとといっても被験者は勿論のこと、検査者も負担になることにある。被験者に心理的負担を掛ける事は臨床家としては、なるべく避けることは当然の措置である。また 10 日間以上の日数を要するということになる、急いで査定を進めて治療的対応を処置しなければならない状況が背後に控えている場合には、現実的には、とても活用できないことになる。ここに Szondi Test を臨床的に活用し、普及を図る上での大きな隘路があったと言わざるを得ない。

そこでこの研究では、Szondi Test の利点を損なわないで、更に Szondi Test の特性を生かす方法として、主に Szondi Test の 1 回施行反応と 2 回目以降に施行した反応について、その関連について調べることにした。

## § 調査の方法

Szondi Test を 2 回以上実施して、第 1 回目の反応と 2 回目以降の反応を比較して、その関連性を調べる。対象者は健常群 80 人、精神疾患 (以下、単に疾患群という) 群 72 人の合計 152 人 (男子 78 名、女子 74 名) である。詳しい内訳は、健常群男子 40 名、健常群女子 40 名、疾患群男子 38 名、疾患群女子 34 名である。

なお衝動過圧については、今回は評定しないで検討する統計学的処理を行った。すなわち、「+・-・0・±」の 4 つ反応型について、第 1 回目と第 2 回目以降の反応についての連関について調べた。施行回数については、2 回施行した者もあつたり、10 回施行した者が混在する。連関を検討する手法として、以下の統計的方法を採用した。

### < 連関係数 $\phi$ の計算方法 >

$\phi$  係数の計算式

Y \ X	x <sub>1</sub>	x <sub>2</sub>	$\Sigma$
y <sub>1</sub>	a	b	a+b
y <sub>2</sub>	c	d	c+d
$\Sigma$	a+c	b+d	n

$$\text{連関係数 } \phi = \frac{(ad-bd)}{\sqrt{(a+b)(c+d)(a+c)(b+d)}}$$

連関係数の数値の意味

～ 0.2	ほとんど なし
0.2 ～ 0.4	弱い連関あり
0.4 ～ 0.7	比較的強い連関あり
0.7 ～ 1.0	強い連関あり

なお連関係数の信頼性の検定については、下記の計算式による  $\chi^2$  検定を行った。

$\chi^2$  検定の計算式

Y \ X	x <sub>1</sub>	x <sub>2</sub>	Σ
y <sub>1</sub>	a	b	a+b
y <sub>2</sub>	c	d	c+d
Σ	a+c	b+d	n

$$\chi^2 = \frac{n \times (ad-bc)^2}{(a+b)(c+d)(a+c)(b+d)}$$

$$df = (2-1) \times (2-1) = 1$$

なお統計的処理の詳しい点については、岩淵 (1997) を参照した。

## 調査の結果

つまり第1回目と第2回目以降の反応型の比較において、連関が強ければ、第1回目とそれ以降の反応の変化はない、若しくは少ないということであり、連関が乏しいということになれば、反応は変化をすることが多いということになる。

まず1回目の反応型を中心にして、2日目以降の反応型の変化について一覧表を作成して検討した。

1回目反応型と2回目以降の反応型の比較については、各因子ごとに表1のような調査表を作成して、反応頻度を調べた。

表 1 各因子の反応型の出現頻度調査用の表

因子	+	-	±	0
+				
-				
±				
0				

最上段の行は、基本となる第 1 回目の反応型

縦列は第 2 回目以降の反応型

各セルには、出現の頻度を数字で記入する

(例) 10 回を施行した事例で、h 因子の第 1 回目の反応が+因子を示し、第 2 回目以降から第 10 回目までの反応では、+反応を 7 回、-反応を 2 回出した場合は、下表のようになる。つまり第 1 回目の反応と 7 回は同じ反応で一致したが、残り 2 回は-反応で 2 回出現し、±反応も 0 反応も出現しなかったことを示している。

表 2 ある被験者の h 因子における反応出現数の表

h	+	-	±	0
+	7			
-	2			
±	0			
0	0			

このような調査表を h・s・e・hy・k・p・d・m の各 8 因子の+・-・±・0 の 4 反応型のそれぞれについて、その出現状況を調べた。調査対象となったのは合計 152 人である。

152 人の実施回数は 2 回以上 10 回までの実施があった。施行回数の内訳は 2 回 23 人、3 回 19 人、4 回 8 人、5 回 7 人、6 回 8 人、7 回 5 人、8 回 6 人、9 回 2 人、10 回以上 74 人。合計 152 人、施行回数は単純計算すると 1063 回であった。なお調査の対象としたものは、1063 回の第 1 回目施行反応 152 施行を基礎とした第 2 回目以降の施行 911 回 (= 1063 回-152 回) である。

そしてまず h 因子について、第 1 回目反応が+反応であった群について、第 2 回目以降も同じ+反応であったか、それ以外の反応であったかについて調べ、その関連係数についての検討をした。

検討1：h＋反応について

表3 S衝動像h＋反応の出現数の調査結果

1回目のh因子の反応型	h＋反応型を示した数	h＋以外の反応型の数	合計反応数
2回目以降もh＋反応	484	111	595
2回目以降はh＋以外	110	206	316
合計反応数	594	317	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算（ $\phi$ 係数）は、既に述べた計算式を使った。

$$\phi = \frac{(484 \times 206 - 111 \times 110)}{\sqrt{554 \times 317 \times 595 \times 316}}$$

この計算式で得られた連関係数は、連関係数 $\phi = 0.496$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.5$ となり、連関の認められる数値となっている。

次に有意差の検定（ $\chi^2$ 検定）を行った。計算式は既述したとおりである。

$$\chi^2 = \frac{911 \times (484 \times 206 - 111 \times 110)}{597 \times 317 \times 595 \times 316}$$

この計算式で得られた数値は、次のとおりである。 $\chi^2 = 196.98$

これは0.1%水準で有意差が認められる値となっている。

検討2：h－反応について

表4 S衝動像h－反応の出現数の調査結果

1回目のh因子の反応型	h－反応型を示した数	h－以外の反応型の数	合計反応数
2回目以降もh－反応	43	60	103
2回目以降はh－以外	50	758	808
合計反応数	93	818	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算（ $\phi$ 係数）はh＋反応型の場合の計算と同様なので、計算式は省略した。

この計算式で得られた連関係数は、連関係数 $\phi = 0.372$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.4$ となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定（ $\chi^2$ 検定）を行った。計算式は省略した。

得られた数値は、 $\chi^2 = 126.02$ となる。この数値は0.1%水準で有意差が認められる数値である。

## 検討 3 : h ± 反応について

表 5 S 衝動像 h ± 反応の出現数の調査結果

1 回目の h 因子の反応型	h ± 反応型を示した数	h ± 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も h ± 反応	14	37	51
2 回目以降は h ± 以外	75	785	860
合計反応数	89	822	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) は h + 反応型の場合の計算と同様なので, 計算式は省略した。

この計算式で得られた連関係数は, 連関係数  $\phi = 0.145$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.1$  となり, 連関が認められない結果となっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は,  $\chi^2 = 19.160$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

## 検討 4 : h0 反応について

表 6 S 衝動像 h 0 反応の出現数の調査結果

1 回目の h 因子の反応型	h 0 反応型を示した数	h 0 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も h 0 反応	56	101	157
2 回目以降は h 0 以外	98	656	754
合計反応数	154	757	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では, 連関係数  $\phi = 0.228$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.2$  となり, 弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は,  $\chi^2 = 47.548$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

## 検討 5 : s + 反応について

表 7 S 衝動像 s + 反応の出現数の調査結果

1 回目の s 因子の反応型	s + 反応型を示した数	s + 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も s + 反応	95	84	179
2 回目以降は s + 以外	92	640	732
合計反応数	187	724	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では, 連関係数  $\phi = 0.398$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.4$  となり, 弱い連関が認められ



ることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 144.645$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

#### 検討 6 : s - 反応について

表 8 S 衝動像 s - 反応の出現数の調査結果

1 回目の s 因子の反応型	s - 反応型を示した数	s - 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も s - 反応	281	153	434
2 回目以降は s - 以外	118	359	477
合計反応数	399	512	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.403$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.4$  となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 147.771$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

#### 検討 7 : s ± 反応について

表 9 S 衝動像 s ± 反応の出現数の調査結果

1 回目の s 因子の反応型	s ± 反応型を示した数	s ± 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も s ± 反応	22	82	104
2 回目以降は s ± 以外	103	704	807
合計反応数	125	786	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.078$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.1$  となり、連関が認められないことが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 5.479$  となる。これは危険率 2% 水準での有意差が認められる数値といえる。

#### 検討 8 : s0 反応について

表 10 S 衝動像 s 0 反応の出現数の調査結果

1 回目の s 因子の反応型	s 0 反応型を示した数	s 0 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も s 0 反応	87	98	185
2 回目以降は s 0 以外	73	653	726
合計反応数	160	651	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算( $\phi$ 係数)では、連関係数 $\phi = 0.391$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.4$ となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定( $\chi^2$ 検定)を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 139.191$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

#### 検討9：e+反応について

表11 P衝動像e+反応の出現数の調査結果

1回目のe因子の反応型	e+反応型を示した数	e+以外の反応型の数	合計反応数
2回目以降もe+反応	82	152	234
2回目以降はe+以外	112	565	677
合計反応数	194	717	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算( $\phi$ 係数)では、連関係数 $\phi = 0.197$ となった。小数点第2位四捨五入では $\phi = 0.2$ となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定( $\chi^2$ 検定)を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 35.506$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

#### 検討10：e-反応について

表12 P衝動像e-反応の出現数の調査結果

1回目のe因子の反応型	e-反応型を示した数	e-以外の反応型の数	合計反応数
2回目以降もe-反応	142	127	269
2回目以降はe-以外	200	442	642
合計反応数	342	569	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算( $\phi$ 係数)では、連関係数 $\phi = 0.204$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.2$ となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定( $\chi^2$ 検定)を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 37.844$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

検討 11 : e ± 反応について

表 13 P 衝動像 e ± 反応の出現数の調査結果

1 回目の e 因子の反応型	e ± 反応型を示した数	e ± 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も e ± 反応	19	93	112
2 回目以降は e ± 以外	84	715	799
合計反応数	103	808	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.067$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.1$  となり、連関が認められないことが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 4.076$  で、これは 5% 水準で有意差が認められた。

検討 12 : e 0 反応について

表 14 P 衝動像 e 0 反応の出現数の調査結果

1 回目の e 因子の反応型	e 0 反応型を示した数	e 0 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も e 0 反応	103	190	293
2 回目以降は e 0 以外	153	465	618
合計反応数	256	655	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.108$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.1$  となり、連関が認められないことが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 10.633$  となり、これは 0.5% 水準で有意差が認められるものである。

検討 13 : hy + 反応について

表 15 P 衝動像 hy + 反応の出現数の調査結果

1 回目の hy 因子の反応型	hy + 反応型を示した数	hy + 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も hy + 反応	17	59	76
2 回目以降は hy + 以外	56	779	835
合計反応数	73	838	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.160$  となった。小数点第 2 位四捨五入では、 $\phi = 0.2$  となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は,  $\chi^2 = 23.181$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

検討 14 : hy - 反応について

表 16 P 衝動像 hy - 反応の出現数の調査結果

1 回目の hy 因子の反応型	hy - 反応型を示した数	hy - 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も hy - 反応	439	148	587
2 回目以降は hy - 以外	128	196	324
合計反応数	567	344	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では, 連関係数  $\phi = 0.348$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.3$  となり, 弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は,  $\chi^2 = 110.570$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

検討 15 : hy ± 反応について

表 17 P 衝動像 hy ± 反応の出現数の調査結果

1 回目の hy 因子の反応型	hy ± 反応型を示した数	hy ± 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も hy ± 反応	35	77	112
2 回目以降は hy ± 以外	77	722	799
合計反応数	112	799	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では, 連関係数  $\phi = 0.216$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.2$  となり, 弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は,  $\chi^2 = 42.555$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

検討 16 : hy0 反応について

表 18 P 衝動像 hy 0 反応の出現数の調査結果

1 回目の hy 因子の反応型	hy 0 反応型を示した数	hy 0 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も hy 0 反応	53	88	141
2 回目以降は hy 0 以外	126	644	770
合計反応数	179	732	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算( $\phi$ 係数)では、連関係数 $\phi = 0.193$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.2$ となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定( $\chi^2$ 検定)を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 34.006$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

#### 検討 17: k + 反応について

表 19 Sch 衝動像 k + 反応の出現数の調査結果

1 回目の k 因子の反応型	k + 反応型を示した数	k + 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も k + 反応	29	79	108
2 回目以降は k + 以外	45	758	803
合計反応数	74	837	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算( $\phi$ 係数)では、連関係数 $\phi = 0.251$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.3$ となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定( $\chi^2$ 検定)を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 57.588$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

#### 検討 18: k - 反応について

表 20 Sch 衝動像 k - 反応の出現数の調査結果

1 回目の k 因子の反応型	k - 反応型を示した数	k - 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も k - 反応	380	156	536
2 回目以降は k - 以外	122	253	375
合計反応数	502	409	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算( $\phi$ 係数)では、連関係数 $\phi = 0.380$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.4$ となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定( $\chi^2$ 検定)を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 131.248$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

## 検討 19 : k ± 反応について

表 21 Sch 衝動像 k ± 反応の出現数の調査結果

1 回目の k 因子の反応型	k ± 反応型を示した数	k ± 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も k ± 反応	13	91	104
2 回目以降は k ± 以外	79	728	807
合計反応数	92	819	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.029$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.0$  となり、連関が認められないことが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 0.746$  となる。これは有意差の認められない結果となっている。

## 検討 20 : k 0 反応について

表 22 Sch 衝動像 k 0 反応の出現数の調査結果

1 回目の k 因子の反応型	k 0 反応型を示した数	k 0 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も k 0 反応	88	71	156
2 回目以降は k 0 以外	155	597	752
合計反応数	243	668	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.298$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.3$  となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 80.960$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

## 検討 21 : p + 反応について

表 23 Sch 衝動像 p + 反応の出現数の調査結果

1 回目の p 因子の反応型	p + 反応型を示した数	p + 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も p + 反応	302	110	412
2 回目以降は p + 以外	151	348	499
合計反応数	453	458	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では、連関係数  $\phi = 0.428$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.4$  となり、弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は,  $\chi^2 = 167.227$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

検討 22 : p - 反応について

表 24 Sch 衝動像 p + 反応の出現数の調査結果

1 回目の p 因子の反応型	p - 反応型を示した数	p - 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も p - 反応	69	104	173
2 回目以降は p - 以外	89	649	738
合計反応数	158	753	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では, 連関係数  $\phi = 0.288$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.3$  となり, 弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は,  $\chi^2 = 75.689$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

検討 23 : p + 反応について

表 25 Sch 衝動像 p ± 反応の出現数の調査結果

1 回目の p 因子の反応型	p ± 反応型を示した数	p ± 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も p ± 反応	19	44	63
2 回目以降は p ± 以外	52	796	848
合計反応数	71	840	911

上記の表から第 1 回目反応型と第 2 回目以降の反応型との連関を求める計算 ( $\phi$  係数) では, 連関係数  $\phi = 0.227$  となった。小数点第 2 位四捨五入で  $\phi = 0.2$  となり, 弱い連関が認められることが明らかになっている。

次に有意差の検定 ( $\chi^2$  検定) を行った。得られた数値は,  $\chi^2 = 47.109$  となる。これは 0.1% 水準で有意差が認められるものである。

検討 24 : p0 反応について

表 26 Sch 衝動像 p 0 反応の出現数の調査結果

1 回目の p 因子の反応型	p 0 反応型を示した数	p 0 以外の反応型の数	合計反応数
2 回目以降も p 0 反応	89	171	260
2 回目以降は p 0 以外	149	502	651
合計反応数	238	673	911

上記の表から第1回目反応型と第2回目以降の反応型との連関を求める計算( $\phi$ 係数)では、連関係数 $\phi = 0.116$ となった。小数点第2位四捨五入で $\phi = 0.1$ となり、連関が認められないことが明らかになっている。

次に有意差の検定( $\chi^2$ 検定)を行った。得られた数値は、 $\chi^2 = 12.386$ となる。これは0.1%水準で有意差が認められるものである。

以下、d因子以降については(下)に続く。

## 参考文献

- 岩淵千明 (1997) 『あなたもできるデータの処理と解析』 福村出版  
岩原信九郎 (1957) 『教育と心理のための推計学』 日本文化科学社  
奥野哲也 (2008) 「ソンディ・テスト」 金剛出版社 『必携 臨床心理アセスメント』  
奥野哲也 (2007) (2008) 「被虐待児童の衝動分析と治療の対応について (上) (下)」 佛教大学教育学部  
論集第18号, 第19号  
奥野哲也 (2006) 「ソンディ・テスト」 創元社 『心理査定実践ハンドブック』  
奥野哲也 (2004) 監修 『ソンディ・テスト入門』 ナカニシヤ出版  
大塚義孝 (1993) 『衝動病理学-増補』 誠信書房  
田中 敏 (1996) 『実践心理データ解析』 新曜社  
Szondi,L.,Moser.,U.,Webb,M.W. (1959) 『The Szondi Test』 J.B.Lippincott Company  
Szondi.L (1947) 『Lehrbuch Der Experimentellen Triebdiagnostik Textband』 Hans Huber  
(佐竹隆三訳 (1964) 『ソンディ・テスト 実験衝動診断法』 日本出版貿易)  
Szondi.L (1944) 『Schicksalsanalyse』 Hans Huber

## (付記)

本研究は、平成19年度佛教大学一般研修の成果としてまとめたものの一部である。また統計的検討の部分については、佛教大学教育学部臨床心理学科専任講師免田賢先生に丁寧に指導をいただいた。感謝の念を込めて付記する。

(おくの てつや 臨床心理学科)

2008年10月6日受理